

第53回

福島県中学校長会研究協議会相双大会

報告書



写真提供：相馬野馬追執行委員会

とき 令和7年10月10日（金）
ところ 南相馬市民文化会館《ゆめはっと》
原町生涯学習センター《サンライフ南相馬》
原町区福祉会館

主催 福島県中学校長会

目 次

◇大会要項 ······ 1

◇分科会記録

第1分科会	教育課程	····· 3
第2分科会	学習指導	····· 5
第3分科会	道徳教育	····· 7
第4分科会	健康・安全教育	····· 9
第5分科会	進路指導	····· 11
第6分科会	生徒指導	····· 13
第7分科会	教職員研修	····· 15
第8分科会	経営課題	····· 17

◇写真記録 ······ 19



第53回 福島県中学校長会研究協議会

相 双 大 会

- 1 大会主題 「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育」
- 2 主 催 福島県中学校長会
- 3 共 催 福島県教育委員会 福島県市町村教育委員会連絡協議会
新地町教育委員会 相馬市教育委員会 南相馬市教育委員会 飯館村教育委員会
浪江町教育委員会 葛尾村教育委員会 双葉町教育委員会 大熊町教育委員会
富岡町教育委員会 川内村教育委員会 檜葉町教育委員会 広野町教育委員会
- 4 後 援 新地町 相馬市 南相馬市 飯館村 浪江町 葛尾村 双葉町 大熊町 富岡町
川内村 檜葉町 広野町 福島県小学校長会 日本教育公務員弘済会福島支部
- 5 期 日 令和7年10月10日（金）
- 6 会 場 【全体会】南相馬市民文化会館《ゆめはっと》 大ホール
【分科会】南相馬市民文化会館《ゆめはっと》 3会場
原町生涯学習センター《サンライフ南相馬》 3会場
原町区福祉会館 2会場

7 日 程

9:30 10:00 10:20 10:40 12:00 13:15 15:25 15:35

受付	開会式	休憩	講演会	移動 昼食 休憩	研究協議	閉会式 <small>※各分科会会場</small>
----	-----	----	-----	----------------	------	-------------------------------

(1) 開会式 10:00～10:20

- ① 開式の言葉
- ② あいさつ
福島県中学校長会長 菅野 浩智
福島県教育委員会教育長 鈴木 竜次 様
- ③ 来賓祝辞
南相馬市長 門馬 和夫 様
- ④ 来賓紹介
- ⑤ 祝電披露
- ⑥ 閉式の言葉

(2) 講演会 10:40～12:00

- ・演題 「福島県“発”のイノベーションを創出する人材」の輩出を目指して
- ・講師 公益財団法人福島イノベーション・コースト構想推進機構 理事長補佐 伊藤 泰夫 様

(3) 研究協議 13:15~15:25

各分科会会場

分科会名 小主題 会 場	支会・発表校・発表者		司会者	運営委員	記録者	進行係
						会場係
第1小主題 (教育課程) ゆめはっと 大ホール	北会津	会津若松市立一箕中学校 河原田哲哉	高橋 純子 (湊学園)	渡部 朋史 (若松二中)	渡邊 定行 (伊達中)	長谷川浩文 (喜多方三中)
	南会津	檜枝岐村立檜枝岐中学校 小野 泰弘	入谷 正典 (只見中)	星 英典 (田島中)		佐藤 公一 (原町二中)
第2小主題 (学習指導) ゆめはっと 多目的ホール	安 達	本宮市立白沢中学校 清水 健一	吉川 奏子 (二本松二中)	大和田康夫 (安達中)	橋本美智子 (東中)	菅野 泰英 (福島二中)
	石 川	玉川村立玉川中学校 服部 明彦	大高 文雄 (古殿中)	石沢 泰蔵 (石川中)		穂積 隆志 (磯部中)
第3小主題 (道徳教育) ゆめはっと 練習室4・5	岩 瀬	天栄村立天栄中学校 市川 知広	須藤 瑞穂 (須賀川三中)	酒井 宏尚 (須賀川二中)	本多 康夫 (若松五中)	高橋 宏信 (岩江中)
	相 馬	南相馬市立石神中学校 小林 正和	高瀬 永志 (中村二中)	塙 広治 (鹿島中)		小林 正和 (石神中)
第4小主題 (健康・安全教育) サンライフ南相馬 集会室	田 村	小野町立小野中学校 原田 貴志	伊藤 恒明 (大越中)	菅野 学 (船引中)	岡部 史則 (浅川中)	山田 知 (東和中)
	いわき	いわき市立三和中学校 竹之内貞夫	小豆畠 忠 (久之浜中)	角田 健司 (植田中)		矢内 信男 (原町一中)
第5小主題 (進路指導) サンライフ南相馬 研修室	伊 達	伊達市立月館学園中学校 佐藤 秀和	佐久間光児 (釀芳中)	邊見 年成 (桃陵中)	土橋 康弘 (昭和中)	積田 育子 (大槻中)
	いわき	いわき市立湯本第二中学校 櫻井 宗成	田中 淳一 (泉中)	草野 秀一 (小名浜一中)		半杭 千歩 (富岡中)
第6小主題 (生徒指導) サンライフ南相馬 会議室	郡 山	郡山市立西田学園 星野 垣希	柏倉 弘人 (守山中)	新田 泰尋 (郡山一中)	佐川 綾子 (遠野中)	松本 裕治 (長沼中)
	耶 麻	北塩原村立裏磐梯中学校 齋藤 和久	伊藤 武徳 (高郷中)	横山 泰久 (喜多方一中)		南郷 市兵 (学び舎ゆめの森)
第7小主題 (教職員研修) 原町区福祉会館 大会議室	福 島	福島市立平野中学校 佐藤 裕子	菅野 重徳 (清水中)	渡部 正晴 (福島四中)	松本 修 (富田中)	田代 茂 (荒海中)
						松本 涼一 (楓葉中)
第8小主題 (経営課題) 原町区福祉会館 中会議室	東西じらかわ	西郷村立川谷中学校 早川 貢	石田富加志 (塙中)	菊池 淳一 (白河中央中)	閑場 俊宏 (西信中)	森 敏行 (草野中)
	両 沼	柳川町立会津柳津学園中学校 佐藤 盛俊	笹川 光威 (新鶴中)	小関 英紀 (高田中)		小林 喜徳 (小高中)
	双 葉	双葉町立双葉中学校 寺島 克彦	海老原 篤 (川内小中学園)	青田 亮一 (なみえ創成中)		

(4)閉会式 15:25~15:35

各分科会会場

【第1分科会 [教育課程] カリキュラム・マネジメントの推進】

【発表者】	会津若松市立一箕中学校	河原田哲哉	檜枝岐村立檜枝岐中学校	小野 泰弘
【司会者】	会津若松市立湊学園	高橋 純子	只見町立只見中学校	入谷 正典
【記録者】	伊達市立伊達中学校	渡邊 定行		
【運営委員】	会津若松市立第二中学校	渡部 朋史	南会津町立田島中学校	星 英典
【進行係】	喜多方市立第三中学校	長谷川浩文		
【会場係】	南相馬市立原町第二中学校	佐藤 公一		

1 発表の概要

(1) 北会津支会

会津若松市立一箕中学校 河原田哲哉

単なる実践の列挙とならないように、検討課題を明らかにし、その上で自校の課題解決のために校長としてどのように関わったのかが分かる研究を進めてきた。各実践における校長の主な関わりは、以下のとおりである。

実践事例1では、系統的で探究的な学びの位置づけのために、教職員の理解促進、地域との連携のリード、教職員の参画を推進した。

実践事例2では、SDGsを柱にした教育活動推進のために、校長が研究推進教師及びコーディネーターを務めるとともに、各教育活動とSDGsとの関連付けを指導助言した。

実践事例3では、地域社会との協働のために、教職員と生徒への目標の明示と共有、人事評価制度を活用した教職員の参画意識の醸成、関係機関との連携の促進を図った。

実践事例4では、PDCAサイクルの確立のために、教職員等の参画による学校経営・運営ビジョンの作成とビジョンの「重点実践事項」・「評価指標」に基づいた自己目標の設定について指導助言した。

実践事例5では、学校経営・運営ビジョンの改善のために、ビジョンの中への「子どもたちの満足度」の位置づけ、校長が作成した定期アンケートの実施、その結果に基づいた改善を指導助言した。

成果として、カリキュラム・マネジメントのあり方を考え、校長として取り組むべき実践課題を明らかにすることや当事者として校長がオーナーシップを発揮することができたことなど、課題として、時代背景等を踏まえ育成したい資質・能力をより明確に捉え、実践を創造する必要があることが挙げられた。

(2) 南会津支会

檜枝岐村立檜枝岐中学校 小野 泰弘

本支会の共通課題を踏まえ、中山間地域の強みを生かすために、研究の視点3を中心に研究を進めてきた。テーマ別に整理した各校の実践の概要は以下のとおりである。

①自然環境・地域フィールドの活用

地域の自然資源と教育課程を結び、学校家庭・地域が連携して学びを支えた。

②郷土料理・伝統文化の継承

地域の技と心を教育課程に組み込んで、世代を超えた学びの実現を図った。

③地域産業・SDGs・循環型社会の学び

地域の仕事や役割を教育課程に組み込み、社会参画の力を育てる取組を行った。

④地域人材との協働・キャリア教育

多様な価値観に触れ、自分らしい生き方を考え、社会とつながる力を育む学びを行った。

⑤地域貢献・世代間交流・郷土愛の育成

地域との協働や世代間交流を通じて、地域の一員としての誇りと自覚を育み、郷土愛を培う学びを行った。

⑥教科横断・総合的な学習の時間の活用

総合的な学習の時間を“地域とつながる学びの軸”として位置づけ、教科横断的な構造の中で、学校・家庭・地域がそれぞれの教育機能を発揮しながら、持続可能な教育課程を構築した。

成果として、生徒の主体性や地域の一員としての自覚の向上、教職員の意識改革と実践力の向上、校内の協働体制の強化、課題として、担当教職員の負荷、地元に精通する教職員が少ないこと、学びの連続性の確保、評価と改善のサイクルが弱いことが挙げられた。



【各支会発表の様子】

2 質疑

(1) 北会津支会の取組について

◇船引南中より 人事評価制度の面談における被評価者との意見の相違について

⇒こまめに進捗状況を確認したり、高めに設定した指標を設定し直したりしたので齟齬等は出ていない。

(2) 南会津支会の取組について

◇小塩江中より 「下郷学」の詳細について

⇒地域と連携して取り組んでいる様々な行事を体系化したものが「下郷学」である。内容としては、太鼓やそば打ち、大内宿の茅葺き、小学校では、温泉や会津鉄道（湯野上温泉駅）など、地域文化を学んでいる。そして、最終的には、町に「今後こうしていこう」と発信していくことをねらっている。

3 協議内容

(1) グループ協議の柱（視点1）

□ 育成したい資質・能力を明確に押された上で、P D C Aサイクルを機能させた組織的な取組について

◇葛尾中より （グループ①）

今年度は「3つの対話」をテーマとして、「哲学対話」、「地域との対話」（ふるさと創造学サミット時に地域の小中学生等との対話）、「英語で対話」（集大成として修学旅行でアメリカでのホームステイ時に対話を実施）を通して、しっかりと話ができる子どもを育成している。

◇小塩江中より （グループ②）

P D C Aについて話し合った。どの学校も学校評価を毎学期行っているが、内容のマンネリ化が課題である。また、Google フォームだと回答率が低くなる傾向がある。保護者の様々な意見にも丁寧に答えていきたい。

◇一箕中より （グループ③）

自尊感情を高めるために、全職員で褒める・認める機会を積極的に作っている。その結果、非認知能力に関する市の調査で数値に改善が見られた。小規模校では、自尊感情は高いが自己マネジメント力に課題がある。

(2) グループ協議の柱（視点2）

□ 各校での地域素材の活用について

◇二本松三中より （グループ①）

お祭り関係（神輿、着付け、太鼓）が多い。また、二本松市にある J I C A（国際協力機構）との連携、川俣町では震災以降、近畿大学による農業関係の支援等が挙げられる。

◇中島中より （グループ②）

経済体験学習、地域学習、職場体験学習、郷土愛学習、コミュニティセンター、修学旅行

（マレーシア）に向けてブリティッシュヒルズや J I C Aとの連携の際の活用が多い。

◇檜枝岐中より （グループ③）

地域活性化の組織によるゴミ拾い、縦割り活動による思いやりや憧れの心の育成、地域の公民館や小学校、特別支援学校との連携、歌舞伎による地域との関わり、野菜作り、曲げわっぱ作り、登山などがある。小さな村では、村の意向も大切にして教育活動を進めている。

4 まとめ

(1) 会津若松市立第二中学校 渡部 朋史

P D C Aで大事なのは「C」の部分である。学校評価以外にも校長自身の生徒へのアンケートや教職員との結果の共有もチェックの点で大切である。P D C Aの「P」については、次期学習指導要領を踏まえ自校の生徒にこういう力を育てたいという理念の下、時数の柔軟な設定など校長のリーダーシップが求められる。北会津支会の発表にもあったが、校長自ら実践し、牽引していく時代となった。

地域との連携では、学校から地域に出て行き、地域もうれしくなるような Win-Win の活動も必要である。今後も校長としてどう関わるかに焦点を当てた研究を継続してほしい。

(2) 南会津町立田島中学校 星 英典

震災を踏まえ、ふるさとの子どもたちをどのように育てたいのかというプランをもち、それを職員や地域と共有し、できることを見つけ、つなげること、そして、子どもたちの学びを深め広げていくことが大切である。

カリキュラム・マネジメントでは、総合的な学習の時間の捉えが重要となる。小学校での学びを教科担任制である中学校的教科間でつないでいく仕掛けとして、総合的な学習の時間は有効である。実際に行動すること（インスタで祭りの参加者募集や新聞紙でのレジ袋作成など）で地域の声の掛け方も変わり、子どもたちの自信や郷土愛、誇りにつながっていく。



【研究協議の様子】

【第2分科会「学習指導」「主体的・対話的で深い学び」の実現】

【発表者】本宮市立白沢中学校	清水 健一	玉川村立玉川中学校	服部 明彦
【司会者】二本松市立二本松第二中学校	吉川 奏子	古殿町立古殿中学校	大高 文雄
【記録者】白河市立東中学校	橋本美智子		
【運営委員】二本松市立安達中学校	大和田康夫	石川町立石川中学校	石沢 泰蔵
【進行係】福島市立福島第二中学校	菅野 泰英		
【会場係】相馬市立磯部中学校	穂積 隆志		

1 発表の概要

(1) 安達支会

本宮市立白沢中学校 清水 健一

はじめに研究の方向と視点、研究の計画と方法について説明し、次に視点に沿って研究の概要と考察について発表した。

視点1については、各中学校の取組をもとに「発問の工夫と、まとめと振り返りの場の充実により、主体的・協働的に学びを深める実践」

「学校の実態を踏まえた校内体制づくりによる授業改善に向けた校内研修の実践」「校内研修を生かした教員の育成と授業改善の実践」について説明し、校長としての関わりを述べた。

視点2については、各中学校の取組をもとに「生徒の主体的な言語学習活動の実践」「授業やその周辺部を活用した自己マネジメント力の育成の実践」について説明し、校長としての関わりを述べた。

視点3については、各中学校の取組をもとに「『できる・楽しい』を実感できる授業の実践」「子ども一人一人がよさを發揮し、よりよい学びを生み出すことができる学習指導の実践」「生徒個々の特性・実態に応じたICT機器の効果的な活用の実践」について説明し、校長としての関わりを述べた。

最後に成果と課題を述べ、教員一人一人がじっくりと「主体的・対話的で深い学び」の推進に取り組む時間を確保できるよう、働き方改革のさらなる推進をしていくとまとめた。



【各支会発表の様子】

(2) 石川支会

玉川村立玉川中学校 服部 明彦

はじめに本支会のテーマ、研究の方向と視点、研究の計画と方法について説明し、次に5校の実践と校長の関わりを中心に発表した。

A校の実践「教科書の読み方に視点を当てた現職教育の取り組ませ方」では、リーディングスキルテストによる実態把握と校長の関わり等について発表した。B校の実践「全国学力学習状況調査を活用した授業改善の実践」では、全国学力学習状況調査から見る伸ばしたい学力の視点と校長の関わり等について発表した。C校の実践「授業状況を把握するためのアンケートの実施による実践」では、アンケート調査による実態把握と校長の関わり等について発表した。D校の実践「学習・道徳アンケートからの実態把握及び分析における校長の関わり」では、アンケート調査による実態把握と校長の関わり等について発表した。E校の実践「校内研修の充実と授業改善に向けた意識改革」では、授業改善と指導力の向上への校長の関わり等について発表した。

最後に研究の成果と課題、まとめを述べた。課題の一つとして、研究授業から日常の授業への展開の難しさがあげられた。

2 質疑

(1) 安達支会の取組について

◇喜多方二中より

授業研究における3つのグループの分け方について

⇒国語、社会、英語で1つ、数学、理科で1つ、技能教科で1つとした。数名で話し合うことで協議内容が充実するとも考えた。

◇飯野中より

クラストックの活用について

⇒有料になるが、授業で教員と生徒の話す割合を解析することができ、授業の振り返りに役立てている。

自己マネジメント力育成において使用している手帳について

⇒生活記録ノートを手帳サイズに縮小したものを使用している。

◇猪苗代中より

言語活動の取り扱いについて

⇒教員が授業の中にしっかりと言語活動を取り入れている。生徒から思考が伴わない発言があった場合は、流さずに根拠を問うようしている。研修を通して思考力が高まるような言語活動を意識づけしている。

(2) 石川支会の取組について

◇猪苗代中より

普段の授業において教員の意欲を持続させるための校長の働きかけについて

⇒教員の意識改革が必要である。校長と研修主任との関係が重要で、まずは、研修主任の意識を高め、研修主任から校長の意図を職員へ伝えるようにしている。

3 協議内容

(1) グループ協議の柱（視点1）

□ 校長として校内研修体制をどう充実させるか。

◇飯野中より

体制づくりの前に、先生方に研修は自分の授業力を向上させるものとして受け止めてほしい。先生方の心に火をつけることが校長としての課題である。体制づくりにおいては、を目指す授業像を明確にして方向性を統一することが重要である。教科の壁を越えて校内一致で研修体制をつくれればよいと考えている。

◇福島二中より

校内組織がベテラン教員と若手教員に分かれる。そこで、意図的にベテラン教員と若手教員を組み合わせ、週に1回の研修の中で課題を持ち寄り、短時間で勉強会を行っている。課題が共通しているので、勉強になっている。

◇中央台北中より

安達支部の発表にあった「直感的な表現」が本校でも多く、課題となっている。そこで、生徒指導委員会の中に現職主任を入れて、主体的・対話的で深い学びについても話し合っている。また、時間を生み出すことが課題である。今後、週4日の部活動を週3日にできないかを検討していく予定である。

◇小原田中より

時間を生み出すことは難しく、研究授業を実践しても事後研究会を開くことができないでいる。それに代わるものとして、校長が授業を参観した感想を1枚にまとめ、授業者に渡している。そこには、普段の授業に生かせるものや深い学びにつながるような問い合わせを入れている。

◇郡山四中より

校長の関わりとして、ICTを活用して良い板書例や生徒の発言をうまく問い合わせているベテラン教員の授業を打ち合わせで紹介している。研修体制では、どう教員を巻き込むか、現職教育に結び付けていくかを考えている。

(2) グループ協議の柱（視点2）

□ 研究授業から日常の授業への展開について

◇喜多方二中より

自校で授業スタンダードを作成し、普段の授業や研究授業で実践している。話し合い活動と基本的な授業づくりを柱立てとし、授業スタンダードを生かしながら授業づくりに取り組んでいる。

◇飯野中より

普段の授業から研究授業へ発展させることを大切にしたい。各教員の人事評価の目標をもとに授業参観しフィードバックしている。

◇三春中より

小学校、中学校で一貫性のある、子どもを主体とした主体的、対話的な学びが進み、町としては浸透している。しかし、発展的な課題を設定するとなると難しさがある。深い学びにつなげていくことが課題である。

4 まとめ

(1) 二本松市立安達中学校 大和田 康夫

学習指導と校長との関連については、校長として全ての教科で学力を上げる視点をもって学校経営を進めることが大切である。また、現職教育も重要である。校長は研究主題を追究した授業実践をさせるために、教員を納得させる指導助言を行う必要がある。

本主題と校長との関連については、校長が明確な方針を出し、それが教員に納得解として伝わり、校長への信頼感が生じていけばよいと考える。

(2) 石川町立石川中学校 石沢 泰蔵

「主体的・対話的で深い学び」の実現は大事であるが、学校経営上、これだけを考える時間はもてない。だからこそ、各支会で研究を進めていくこの会は貴重である。本日の発表や協議を通して、考えを深めることができた。

校長として、授業をどう考えていくかをしぼることは難しい。一教員として一番大事だと思うことを達成しようとするとき、大事だと思うことだけではなく、他にもついてくるものはあると考える。

【第3分科会「道徳教育」よりよく生きようとする意志や能力を育む道徳教育の充実】

【発表者】天栄村立天栄中学校	市川 知広	南相馬市立石神中学校	小林 正和
【司会者】須賀川市立第三中学校	須藤 瑞穂	相馬市立中村第二中学校	高瀬 永志
【記録者】会津若松市立第五中学校	本多 康夫		
【運営委員】須賀川市立第二中学校	酒井 宏尚	南相馬市立鹿島中学校	塙 広治
【進行係】須賀川市立岩江中学校	高橋 宏信	【会場係】南相馬市立石神中学校	小林 正和

1 発表の概要

(1) 岩瀬支会

天栄村立天栄中学校 市川 知広

本支会では、各校や地域の実態が異なるため、研究の視点についてアンケート調査による現状分析をもとに、学校規模や地域特性に応じて柔軟に取り組んだ研究実践について説明し、その考察を発表した。

(研究の方向性)

- 予測困難な社会を、前向きにたくましく生き抜く力の育成
- 道徳教育推進教師を中心とした学校全体で道徳教育に取り組む体制
- 道徳性や人格育成のため、家庭や地域社会と連携した取組の推進

(研究テーマ)

「学校・地域ぐるみの道徳教育の創造」

(実践の概要)

- 校長のリーダーシップのもと、全職員による「目指す子どもの姿」を共有し道徳教育の方針を明確化した取組
⇒グランドデザインを形式的なものではなく、道徳教育の方向性を明確に示し実践した。
- 全教員が参画する道徳の授業体制を推進した取組
⇒全教員が担当するローテーション授業を実施し、協働的な教材研究の蓄積や教員個人のよさを引き出すことにつながった。
- 授業と各教科や体験活動とを関連付けたカリキュラム・マネジメントにより、学びを深める取組
⇒学校の全ての教育活動や体験的活動とのつながりを関連付け、校長が体験的活動の質的向上のため指導するとともに、関係機関との連携を図る実践を行った。
- 校長が地域との関係づくりをもとに連携を図った道徳教育を推進した取組
⇒道徳科と総合的な学習の時間を関連させ、「ふるさと納税返礼品」「市HP掲載内容」などから郷土愛を育む道徳教育を推進した実践（成果と課題）
- 校長が道徳教育に対する明確な方針を打ち出すことにより、教員との間で、指導体制や指導方法を共有し、充実が図られてきている。

▲道徳教育を組織的に進めていくため、道徳教育推進教師等の育成を図る校長としてのかかわりや組織体制の構築が課題である。



【岩瀬支会発表の様子】

(2) 相馬支会

南相馬市立石神中学校 小林 正和

本支会における、震災と原子力災害の経験を踏まえ、三つの視点から、人づくり・絆づくり・ふるさとへの誇りの育成など道徳教育の充実に向けて取り組んだ各校の特色ある実践について、生成AI (Google) を用いて各校の実践をもとに説明し、その考察を発表した。

①視点3の「道徳教育推進教師を中心とした協力的な指導体制の充実」について

(実践の概要)

- 校内データベースを構築し、教材研究等を共有し授業効率を向上させた実践（中村二中）
- 学年間ローテーション道徳により、校長が授業の質的向上を支援していく実践（向陽中）
- 小中同居型小規模校における、学習過程を継続的に見直す実践（磯部中）
- 人権教育に焦点化し、組織的・計画的に共生する力の育成を目指す実践（原町一中）
- 道徳推進教師とスクールカウンセラーを活用し、「相互理解・寛容」を重点化していじめの未然防止につなげる実践（鹿島中）

②視点4「ひとづくり・きずなづくり・ふるさとへの誇りと自信づくり」のための道徳教育の充実について

- 県外の学校と交流を図り、防災教育を道徳教育に生かした支え合いを育む実践（尚英中）
- 歴史的な地域教材を教育計画に位置付け、道徳教育に生かした実践（原町三中）
- 他県との交流を企画し、合唱曲「群青」によ

り命の大切さを考えさせる実践（小高中）
○「いいいたて学」を活かし、地域と連携した道徳教育を推進する実践（いいいたて希望の里学園）
③視点1の「道徳的諸価値についての理解と、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度の育成」について
○生徒の心を開き、命の教育を心に響かせる校長メッセージの発信と全校道徳（中村一中）
○外部人材や保護者等、多様な意見を道徳に生かす対話を重視した授業実践（原町二中）
○保健体育科「ウォーキングフットボール」を道徳教育に活かし、道徳的実践意欲や態度を育む実践（石神中）
(成果と課題)
○震災を経た地域ならではの実践を地域の紹づくりや生徒の人間的成长に繋げる取り組みで道徳教育に活かしている。
○各校の様々な取り組みが、教員の指導力向上につながる効果が見られた。
▲道徳科の「評価（視点2）」に関する具体的な実践につながらなかった。評価の工夫は今後の研究課題で、実践の蓄積が期待される。



【相馬支会発表の様子】

2 質疑

(1) 岩瀬支会の取組について

◇植田東中より 休日等の活動における教員の役割分担について

⇒校外への訪問は、総合的な学習の時間等に計画的に実施し、学年の教員が引率する形で対応した。

◇勿来二中より 道徳の授業において、担任外（校長、教頭等）が担当したり、教員が自身の得意分野を複数年にわたって教えたりするような、柔軟に対応した事例について

⇒ローテーション授業を導入しており、学年をまたいで授業を担当することもある。

◇棚倉中より 実態に応じた重点項目の設定のための客観的なデータの活用について

⇒Q Uなどの客観的指標と重点内容の運動は完全には確立されていない。

◇棚倉中より 生徒の変容について

⇒生徒たちは強い達成感や地域への貢献意識を抱いてきている。

(2) 相馬支会の取組について

◇ひらた清風中より 説明のために使用した生成AI（Google Notebook LM）について

⇒作成した資料をAIが内容を要約し、重要なトピックを抽出した後、新たな資料を対話形式の音声と共に生成する機能がある。入力した資料のみに基づいた内容に限定される。

3 協議内容

(1) グループ協議の柱（視点1）

□ 道徳教育推進教師を中心とした協力的な指導体制の充実【視点3】

◇矢祭中より 各校の情報共有をクラウド上で行っている。経験の浅い教員が多いため、共通実践が可能な道徳で授業改善を図っている。

◇田人中より 小中併設校の特性を活かし、小中共通の道徳研究を推進している。

◇植田東中より 学校規模によって道徳推進教師の選定や育成の仕方が異なる。

◇山木屋中より 初任者研修をきっかけとして、道徳推進教師が中心となり道徳の授業研究を全校で推進し、効果的に活用している。

◇大鳥中より 道徳推進教師が機能していない現状があるため、目指す生徒像を各学年に具体化・焦点化し授業展開を目指している。

(2) グループ協議の柱（視点2）

□ 生徒自ら考え理解し、主体的に道徳性を育むための指導と評価の工夫【視点3】

◇天栄中より 年度当初に重点化したものを見示し、毎時間の記録を累積し、どのように生徒が変容したのかが大事である。

◇錦中より どの時間でも活用可能なチェックシート等をポートフォリオでまとめる。

◇石神中より 道徳の時間の変容のみ評価し、累積していく。

◇鹿島中より 学期末・年度末に最も記憶に残った授業について、生徒に振り返らせ蓄積する。

4 まとめ

(1) 須賀川市立第二中学校 酒井 宏尚

支会の各校の実践から、道徳教育の目標の明確化、全教員の参画、ミドルリーダーの育成など持続可能な組織づくりを、校長がリーダーシップをどう發揮して道徳教育を推進していくかが重要である。

(2) 南相馬市立鹿島中学校 塙 広治

相馬ならではの震災等の経験は、今後も継承していくとともに、つなぐ道徳教育の視点、人材活用、組織の活性化を図るための道徳推進教師の育成を充実させていく必要がある。

【第4分科会【健康・安全教育】健康で安全な生活と豊かなスポーツライフを実現するための教育の充実】

【発表者】小野町立小野中学校	原田 貴志	いわき市立三和中学校	竹之内貞夫
【司会者】田村市立大越中学校	伊藤 恒明	いわき市立久之浜中学校	小豆畑 忠
【記録者】浅川町立浅川中学校	岡部 史則		
【運営委員】田村市立船引中学校	菅野 学	いわき市立植田中学校	角田 健司
【進行係】二本松市立東和中学校	山田 知		
【会場係】南相馬市立原町第一中学校	矢内 信男		

1 発表の概要

(1) 田村支会

小野町立小野中学校 原田 貴志

生徒の現在の生活環境とその背景から、学校としての取組と校長の学校経営に求められることについて発表した。課題とその解決に向けた手立てを明確にし、組織として取り組むことが重要である。視点1「生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現していく資質・能力の育成と体力向上」、視点2「食育の推進及び心身の健康の保持増進や感染症等の予防と対策に関する指導の充実」、視点3「身の回りの生活の安全、交通安全、防災に関する指導や情報化の進展に伴う事件・事故の防止等の新たな安全上の課題に関する指導の充実」についての研究とその成果について発表した。

(2) いわき支会

いわき市立三和中学校 竹之内貞夫

はじめに研究の趣旨、健康課題の背景の説明をした。研究の方向と視点を『体力の向上』『運動習慣の確立』『スポーツとの多様な関わり方』等に関する指導を充実させ、生涯を通して運動に親しむ資質・能力を育てていくために、校長の関わりやマネジメントはどうあるべきか」とし、研究推進校の実践をもとに分析・考察を行った。主に体力・運動能力の向上、豊かなスポーツライフの啓発について、3校の実践事例を発表した。校長が明確な方針を示し、学校全体で共有して全職員で推進することや、学校の特色を生かした工夫ある取組の重要性について発表した。



【いわき支会発表の様子】

2 質疑

(1) 田村支会の取組について

◇附属中より 食育における教科横断的な実践について

⇒社会科の授業における料理の歴史的背景や、家庭科の授業において地域おこし協力隊による他国の料理の紹介、給食での国産品の提供と畜産農家の方の話などである。

◇附属中より 部活動の地域展開について

⇒少子化で部員が減少している。地域の方に学校の部活動の指導に入ってもらっている。部員の少ない部を維持していくかを検討しているところである。今は一部の部であるが、他の部でも進めていく考えである。

(2) いわき支会の取組について

◇鏡石中より 体力向上タイムの時間や内容について

⇒A中では、放課後部活動前に20分間を設定している。縄跳びや持久走、体育フェスティバルに向けた練習を行っている。B中では、1月ごろまではなわとびコンテストにむけての練習をメインに行い、その後は音楽に合わせて10分間のランニングタイムを毎週水曜日の放課後に行っている。

◇鏡石中より 全教職員の合意について

⇒みんなでやることが当たり前という意識がある。

3 協議内容

(1) グループ協議の柱（視点1）

□ 防災教育、防災学習について

防災の対象や考え方が変わってきている。学校の実情によっても変わる。自分の命は自分で守るという意識も大切である。

◇西根中より 校庭を熊が横切り、マスコミも来た。対応として、下校時の保護者への引き渡しを1週間行った。教育委員会に依頼して、希望生徒に熊鈴を配付した。安全には十分注意するよう注意喚起や、安全意識を高めるよう指導している。近隣の学校にも出没しているので、学校間での情報交換、関係機関との連携を図っている。

◇三和中より 学校から安全安心メールで、保護者へ情報を提供するとともに、生徒へは注意を促している。生徒の会話の中にも熊鈴の持参が出るようになっている。

◇内郷一中より 津波の避難訓練を実施しており、東日本大震災時はその経験が生きた。災害に備えて準備をしておくことが大切である。
◇若松四中より 東日本大震災について、浜通りと会津では、生徒の意識の差が大きい。会津では、少しずつ忘れ去られているように感じる。校長という立場で、福島県全体のこととして防災意識を高めていかなければならない。

(2) グループ協議の柱（視点2）

□ 生涯スポーツにつなげていくためのマネジメント力、自分手帳のDX化、各校の体力向上の取組について

◇東北中より 全員が部活動に加入している。冬休み期間中に希望生徒を対象に部活動前の30分間で体力づくり講座を行っている。自分の目標タイムを設定し、タブレットを活用しながら行うことで、自己記録を伸ばしている生徒が多い。なわとびコンテストに参加している。体育の授業の前段として、音楽に合わせてのストレッチ、縄跳び、補強運動、準備運動としてのストレッチと年間を通して行っており、とても効果的である。

◇鏡石中より 体を動かすことに親しむことを目的に、11月中旬に学年ごとに校内体育祭を実施している。とても盛り上がる行事となっている。体を動かすために必要なのは栄養素であると考え、養護教諭、栄養技師によるアスリートのための栄養講座を行っている。

◇内郷一中より 体力テストに向けてのオリエンテーションをしっかり行うことで、生徒各自が目標を設定しやすくなる。

◇東和中より 自分手帳のDX化にむけて、食育、保健、体育で実践研究校を指定している。令和6年度の体力運動能力テストでは、本県の児童生徒は全国並である。課題としては、総運動時間が全国でワーストになっている。自分手帳やなわとびコンテスト等を効果的に活用しながら、健康マネジメント能力を育成していくことがポイントとなるのではないか。

□ 部活動地域展開について

◇若松四中より 会津若松市では、現在合同練習会のような形で行っている。来年度からは、平日は学校、休日は地域スポーツの合同練習会を行う予定である。

◇附属中より 3年生が引退後、2学期から本格的に部活動改革を行った。平日の部活動は週に3日、休日は部活動としてはやらない

ようにした。このことは、生徒に時間の使い方を主体的に考えさせるきっかけになるとともに、教員の働き方改革にもつながっている。

4 まとめ

(1) 田村市立船引中学校 菅野 学

小学校において特設部の廃止が進んでいる。特に、運動関係では、以前はできていたことができないで中学校に入学してくる生徒もいる。豊かなスポーツライフを目指すために、運動嫌いをなくすということが一つの大きな課題ではないか。運動能力も両極端になってきているのではないか。体育科の教員も授業づくりで苦労しながら工夫して行っている。健康課題については、体育科以外の教職員も共通理解を図りながら解決に向けて取り組んでいくことが大切である。全校で取り組むフェスティバル的な催しも有効である。SNSや肥満の問題は、学習にも影響を及ぼす課題である。学校保健委員会等も機能させて解決を図っていく。学校に要求されるものも多いが、地域で行っていくという雰囲気も出していくようにする。

(2) いわき市立植田中学校 角田 健司

「健康・安全教育」に係る「校長の役割」「校長としての関わり」を分類すると、「リーダーシップ」「構想力」「発信力・情報収集力」「調整力」に集約できる。校長として、立場や能力を生かして、教職員に影響を与えていくことが、学校を変える原動力となる。それが校長としての役割でありやりがいにもなる。「トップボトムアップ（ボトムアップ+トップダウン）」も学校経営において大切である。校長が動かないと学校は変わらないが、だからと言って、「トップダウン」でいくと、教員はやらされ感や多忙感が先に立つこともある。校長にとって人材育成も大事な役割である。様々な場面で、教頭や教諭に役割を与え、学校運営に必要な力を引き継ぎながら、次の世代の学校を担っていける人材を育てていかなければと思いながら働きかけを行っている。一教諭ではできないが、校長だからこそできることがある。そういうことを常に念頭に置いて校長職を全うしていってほしい。



【研究協議の様子】

【第5分科会「進路指導」一人一人の社会的・経済的自立に向けたキャリア教育と進路指導の充実】

【発表者】伊達市立月館学園中学校	佐藤 秀和	いわき市立湯本第二中学校	櫻井 宗成
【司会者】桑折町立釀芳中学校	佐久間光児	いわき市立泉中学校	田中 淳一
【記録者】昭和村立昭和中学校	土橋 康弘		
【運営委員】伊達市立桃陵中学校	邊見 年成	いわき市立小名浜第一中学校	草野 秀一
【進行係】郡山市立大槻中学校	積田 育子	【会場係】富岡町立富岡中学校	半杭 千歩

1 発表の概要

(1) 伊達支会

伊達市立月館学園中学校 佐藤 秀和

本支会では研究の趣旨として産業・就業構造の変化におけるスキルの変容に対応するため、生徒が社会的・職業的自立に向けて必要な資質・能力の育成を掲げた。キャリア教育充実のために各視点に基づいたキーワード及び具体的な実践を説明し、その考察を発表した。

【視点1】「社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を育成する系統的なキャリア教育の充実」について

(実践の概要)

◇教育活動全体を通したキャリア教育の重要性を説明（校長）

◇各教育活動と基礎的・汎用的能力の関連表の作成（教頭・キャリア教育担当）

◇見通しを立て、振り返る活動の継続的な実施（各担任等）

(成果と課題)

○「キャリア教育=進路指導」のような狭い捉え方が改善されてきた。

▲「キャリアパスポート」等の活用により、見通しを立て、振り返る場を設定し、自分らしさの認識や社会との接続ができるようになる。

【視点2】特別活動を要としつつ教育活動全体を通して取り組まれる組織的・計画的な進路指導の充実

(実践の概要)

◇総合的な学習キャリア教育計画の見直し

◇地域への参画や異学年交流の推進

◇活動の振り返りによる自己理解等

(成果と課題)

○成果や課題を分析し、改善につなげようとする自己管理・理解能力の高まりが見られた。

▲地域との連絡調整を図る校長を含めた教職員の負担をどのように軽減していくか。

【視点3】学校と地域社会や産業界等が連携・協働した体験活動の充実

(実践の概要)

◇1、3年生で「職業人に聞く、話す会」、2年生で「職場体験」を実施

◇職業観や地域の歴史や文化などを理解

- ◇企業が欲している人材や組織の理解
- ◇普段からの礼法や身の回りの整理整頓など社会で生きていることの学び
(成果と課題)

○系統性を持たせた計画・実践をした結果、基礎的・汎用的能力が身についた。

▲地域行事への参加等、校長が休日に活動する負担が大きい。ある程度地域を知っている状況でないと活動が停滞する恐れがある。



【伊達支会発表の様子】

(2) いわき支会

いわき市立湯本第二中学校 櫻井 宗成

代理：いわき市立玉川中学校 柴田 貴生

湯本第一中学校 中田 敬介

はじめに研究の趣旨、視点について説明し、その視点に沿って研究の概要について発表した。本支会の取り組みとしていわき市教育目標『次代のいわきを担う「生きる力」を身に付けた子どもの育成』に基づき具体的な方策について3カ年計画で研究実践を行う。

第I期（令和7年度）

ア 研究計画の作成、文献研究、実態調査

イ 研究の視点を明確化

ウ 各校の研究実践を集約、課題の明確化

(1 概要と考察)〈A中の実践〉

①総合的な学習の時間での「キャリア教育」に関する学年テーマの設定 【視点2】

1年〈小名浜を知る〉2年〈小名浜で働く〉

ファイナンスパークでの活動、3年〈小名浜に貢献する〉

②進路指導を意識しながらの「○○教室」や「□□講座」等の外部講師・機関活用【視点1】

(2 概要と考察)〈B中の実践〉

①学力向上支援アドバイザー等の活用による

授業内でのキャリア形成 【視点2】
 ②体験活動 地域の人材を活用した出前授業
 温泉・炭鉱の歴史 フラダンス体験 【視点3】
 ③文化祭において生徒がリーダーシップを發揮して主体的な活動を行った実践 【視点2】
 (成果と課題⇒校長の関わりの視点から)
 ○講師選定や活動時期について、十分検討するようになり、活動が充実するようになった。
 ○主目的がキャリア形成であることの共通理解が図られていたため、目標や目的を持って取り組むことができた。
 ○生徒を主体とする活動は、指導する教師側にとっても達成感のある活動となった。
 ▲教職員の受け止め方に個人差があり、機会を捉えての繰り返しの指導が必要である。
 ▲時間的な制約が多い中で校長の意図を浸透させるための時間の確保や協議の場の確保。



【いわき支会発表の様子】

2 質疑

(1) 伊達支会の取組について

◇会北中より 【視点2】3年間を見通した進路指導のビルドアップとは?
 ⇒職場体験は2年生中心だが、1、3年生にも職業観を醸成する行事を系統的に位置づけてキャリア教育を進めている。

◇富岡中より 職場体験病院との連携は?
 ⇒地域に密着した病院で連携がとれている。
 ◇磐梯中より コミュニティ・スクールを通しての連絡調整は?
 ⇒町1校の中学校であり、教職員の負担軽減のため校長が働きかけをしている。

(2) いわき支会の取組について

◇渡利中より ファイナンスパークとは?
 ⇒市体験型経済学習施設（小5、中2対象）キャリアパスポートを所見代わりとは
 ⇒「いわきっ子チャレンジノート」総合所見の代わりとして活用（学習成績は別）

3 協議内容

(1) グループ協議の柱（視点1）

□ 教育活動全体を通してのキャリア教育
 ◇野田中より 視点が大事、一つ一つの行事

の目的と目標を明確にし、共有すること。
 ◇大玉中より 総合学習がマンネリ化（1年地域を知る、2年職場体験、3年地域貢献）し、小学校も実施。また職場体験は大事だが職員の負担になりやめる学校が増えている。

⇒月館学園より 小中一貫校、系統的、発達段階を踏まえた計画、異学年交流、防災教育等、中学生が小学生の手本に。

⇒いわき支会 小学校ではスクーデントシティー（お店屋さん）を実施。小学校のキャリア学習をリサーチしておくことが大切。

⇒福島支会は職場体験を5日間実施しており行政の協力がある。大変だがやる価値がある。コミュニティ・スクールの熟議のテーマで「地域連携」を実施。

◇大玉中より 地域学校協働本部が教育委員会にあり、コーディネーターが手配している。

◇大槻中より 市内の専門学校で職業講座。

受け入れ先も行っている。ハイブリッド型

◇岩瀬中より 県の産業人材育成事業を活用

(2) グループ協議の柱（視点2）

□ キャリア教育のめざす、基礎的・汎用的能力の育成について

◇滝根中より 伊達支部の「育成したい基礎的・汎用的能力と各教育活動との関連表」が参考になった。系統的学習の第一歩になる。

伊達支会⇒時間がとれれば、教職員と相談して創りあげるとさらに良い。

◇矢吹中より 「矢吹創生学」町の良いところを提言している。小学校、光南高校との連携

◇磐梯中より 修学旅行で商人体験を実施。

◇会北中より 喜多方市、西会津町でアントレプレナーシップ（起業家体験）教育の実践

◇尚英中より 関連表を活用できれば。行事のワンペーパーのねらいのところに基礎的・汎用的能力のねらいを1文入れるだけでどの能力を育成したいのかがわかるのでは。

4 まとめ

(1) 伊達市立桃陵中学校 邊見 年成

総合的な学習の時間においては校長として「何を学ばせたいか」を職員に伝えることが大きな役割である。地域との連携においてコミュニティ・スクールや商工会との「ギブアンドテイク」の関係性が重要である。

(2) いわき市立小名浜第一中学校 草野 秀一

本会は「経営者の視点」で研究を進めなければならない。校長として目的を捉え、どう向き合い動くのかが研究のスタートである。各支会の情報交換が有意義であり、両支会ともに素晴らしい実践であった。

【第6分科会「生徒指導」自他を敬愛し他者と協働しながら自己実現を図るための自己指導能力を育成する生徒指導の充実】

【発表者】郡山市立西田学園 星野 亜希	北塩原村立裏磐梯中学校 斎藤 和久
【司会者】郡山市立守山中学校 柏倉 弘人	喜多方市立高郷中学校 伊藤 武徳
【記録者】いわき市立遠野中学校 佐川 紗子	
【運営委員】郡山市立郡山第一中学校 新田 泰尋	喜多方市立第一中学校 横山 泰久
【進行係】須賀川市立長沼中学校 松本 裕治	
【会場係】大熊町立学び舎ゆめの森 南郷 市兵	

1 発表の概要

(1) 郡山支会

郡山市立西田学園 星野 亜希

本支会における、3つの視点（【視点1】好ましい人間関係を築き、他者と協働しながら自己実現を図るための自己指導能力を育成する学校教育の在り方、【視点2】いじめ問題への対応や自殺の防止及び不登校生徒への支援の在り方、【視点3】家庭や地域及び関係機関、専門スタッフ等との連携・協力を密にした生徒指導の推進）について、支部の実態を踏まえ取り組んだ共通実践とその考察を発表した。

視点1については、「SWOT分析による自校課題の共通理解と共通実践」、「教育目標具現化に向けた7つの力の習得」に取り組んだ。SWOT分析を通して、教職員一人一人が自校の課題について主体的に考えることにつながり、生徒指導に関する戦略図を作成したり、公民館や小学校と連携したりしたことで、積極的な生徒指導を推進することができた。

視点2・3については、「『組織的アプローチ』による不登校支援体制の構築」、「誰一人取り残さないための生徒指導の充実」により、学校経営ビジョンと学校課題をリンクさせることができ、一体感のある学校づくりにつながること、校内外の関係機関との連携を図り、様々な視点から学校経営を振り返ることで、生徒の安全・安心の確保など生徒を多面的に支援していくことができるなどを確認できた。

引き続き「ゆとり」を生む「働き方改革」の推進や人的・物的整備により持続可能性を高めていくことが求められる。

(2) 耶麻支会

北塩原村立裏磐梯中学校 斎藤 和久

はじめに地区の生徒の実態や研究計画、校長の課題意識を明らかにするためのアセスメントシートの集計結果について説明し、そこから見えてきた共通課題を踏まえた研究の視点に沿って研究の実際について発表した。

視点1の「好ましい人間関係を築き、他者と協働しながら自己実現を図るための自己指導

能力を育成する学校教育の在り方」について、各中学校の実践をもとに「自己肯定感が育つ授業」を目指した校長による模範授業の実践や、学校統合を控え人間関係作りを意識した行事の実践について説明した。

視点2「いじめ問題への対応や自殺の防止及び不登校生徒への支援の在り方」については、「いじめを絶対に許さない」というメッセージの継続発信やOJTによる若手教員の生徒指導対応力の向上を目指した取り組みにより、教員一人一人の生徒指導力及び学校全体としての組織的対応力の向上につながった。

視点3「家庭や地域及び関係機関、専門スタッフ等との連携・協力を密にした生徒指導の推進」については、主任児童委員によるサポート体制整備や地域学校協働本部事業の活用など、校長の働きかけにより外部機関との連携が進み、生徒・保護者支援の体制が強化された。

校長が明確に方針・方向性を示しリーダー性を發揮することで「チーム学校」の体制整備を進めることができ、教職員の意識改革にもつながったこと、生徒の人間関係づくりにも変容が見られたことなどが成果として挙げられた。

教職員のさらなる意識改革や不登校への組織的な取組の強化に向け、アセスメントシートのさらなる活用、地区として目指す生徒像の明確化に取り組んでいく。



【郡山支会発表の様子】

2 質疑

(1) 郡山支会の取組について

◇喜多方一中より 実践例1の「課題解決に向けた戦略図」の作成の過程について

⇒これまでの実践を振り返りながら、目指す生徒像を核に、生徒指導諸課題の解決の方法をまとめている。

◇喜多方一中より 実践例2の「7つの力」について

⇒生徒の実態を踏まえ、身に付けさせたい力を校長が決定している。

(2) 耶麻支会の取組について

◇郡山一中より 学校経営・運営ビジョンのスリム化について

⇒作成の経緯を前任の校長や教職員から確認した上で、全教職員で見直した新たな重点目標を掲げる一方で、具体的な実践事項は表記せず、焦点化・スリム化を図った。



【耶麻支会発表の様子】

3 協議内容

(1) グループ協議の柱（視点1）

□ 充実した生徒指導と働き方改革とのバランス

◇岳陽中より

学校行事が多く慌ただしい2学期は、生徒指導の問題が発生しやすい。放課後の教室環境を確認し、朝、静かに読書ができる体制を整えるなど、日頃の取り組みを重視している。問題発生時は、若い教員が一人で抱え込まないよう、学年主任を中心に組織的に対応している。

◇長沼中より

早めの対処が働き方改革に繋がることについて教職員の理解を得ながら取り組んでいる。

◇三穂田中より

早期発見・早期対応・早期解決を常に意識し、組織的に対応することが大切である。組織力の向上の視点から、報連相の基本についても、都度確認している。

◇梁川中より

年間を通してどういった資質能力を育てたいかを念頭に、そのために教員がやること、生徒たちに取り組ませることを適切に判断する必要がある。時期によって注意するべき課題を予想しながら、危機管理体制を整えたい。

校長として、即対応すべきことと長期的スパンで解決を目指すこと、自分でやることと組織的に対応することなど、適切に判断できるよう常に意識している。

◇鮫川中より

突発的な生徒指導事案を未然に防ぐためには、生徒指導の実践上の4つの視点を踏まえ、積極的な生徒指導を充実させることが不可欠である。

(2) グループ協議の柱（視点2）

□ さらなる教職員の意識改革と学校運営への参画意識の向上

◇長沼中より

教職員の参画意識を高めるためには、校長として方向性は示し、具体策や手段については与えすぎないことも必要である。

◇三穂田中より

校務分掌を見直し、担当業務を軽減する一方で、核となるポストを明確にすることで、多忙感の解消や学校運営への参画意識の向上にも繋がっている。

◇鮫川中より

さらなる参画意識の向上のためには、教職員や生徒の意識調査を研究のスタートに据えることも有効であると考える。

4 まとめ

(1) 郡山市立郡山第一中学校 新田 泰尋

耶麻支会の発表について、校長の課題意識を数値化・可視化し、学校規模に応じた課題や、規模を問わない共通課題を取り上げ、研究実践とその考察に取り組んでいる。エビデンスを挙げて自己分析することの必要性を実感させる発表であった。縦割り活動の実践や「いじめを許さない」というメッセージの継続発信など、好実践事例も数多く紹介され、分かりやすく示唆に富んだ発表であった。

(2) 喜多方市立第一中学校 横山 泰久

郡山支会の発表について、校長として大切にしてきた「そろえること つなぐこと まわすこと」について再認識するとともに、自身の課題も見えた発表であった。郡山市はSDGs宣言の町であるが、17番目の目標は「パートナーシップで目標を達成しよう」である。これからも校長会のパートナーシップで、学び続けていきたい。

【第7分科会「教職員研修」「令和の日本型学校教育」を担う教師の育成】

【発表者】福島市立平野中学校 佐藤 裕子
【司会者】福島市立清水中学校 菅野 重徳
【記録者】郡山市立富田中学校 松本 修
【運営委員】福島市立福島第四中学校 渡部 正晴
【進行係】南会津町立荒海中学校 田代 茂
【会場係】檜葉町立檜葉中学校 松本 涼一

1 発表の概要

(1) 福島支会

福島市立平野中学校 佐藤 裕子

本支会における「教師が感じて動き出す学び」へについて9つの中学校の具体的な取組・実践の内容について説明した。

- ① 人事評価シート等に記録の蓄積（ICT活用）によって、面談を充実させている実践【視点1】
- ② 外部講師招聘による「チームとしての学校づくり」の実践【視点1】
- ③ 初任者研修を利活用したベテラン教員啓発の実践【視点1】
- ④ 新たな課題（SDGs教育）に対応できる力を高める実践【視点2】
- ⑤ ICT活用法等についてのチームとしての研修の実践【視点2】
- ⑥ 若手ミーティングによる学校の組織力強化の実践【視点3】
- ⑦ 地域人材（ゲストティーチャー）との連携・協力により教育力を向上させている実践【視点3】
- ⑧ 自校の課題解決に向けてPDCAサイクルを機能させている実践【視点3】
- ⑨ 研修が変われば学校が変わる“研修リデザイン”



【福島支会発表の様子】

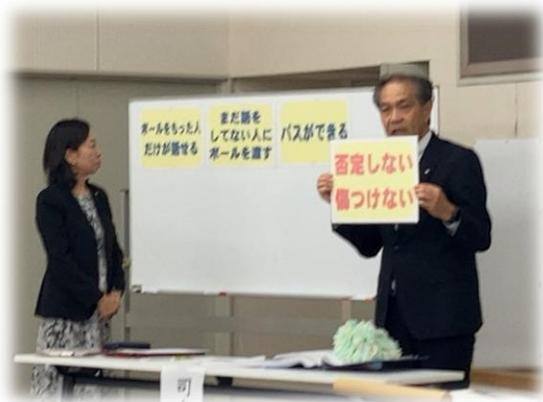
(2) 福島支会

福島市立清水中学校 菅野 重徳

上記③の研究内容について、前任校（桑折町

立釀芳中学校）での実践についての説明があり、「初任者研修を利活用したベテラン教員への啓発」【視点1】についての3つの実践研究を発表した。

- ① 学校教育や教師としての仕事に関する、素朴な疑問や悩みなどの話合い
- ② 相互啓発の促進へ向けて心理的安全性を確保したり高めたりする留意点を揭示
- ③ 初任者のアウトプットによる研修会を設定



【福島支会発表の様子】

2 質疑

(1) 福島市立清水中学校の取組について ◇川部中より

先生が子どもを見るスタンス、校長が先生を見るスタンスがあると思うが、肯定的なフィードバックがとても難しいと感じている。先生方を見る視点やフィードバックにいたる観察や記録について教えてほしい。

⇒ 職員室と教室は相似形。年度初めの職員会議で留意点を確認している。サーバントリーダーシップが大切。若手教員はできないのだからやってあげて本人を指導していく。教え授ける研修ではなく、「見る。聞く。つなぐ。」を意識している。相互変容が生まれるようなフィードバックが大事なのではないか。

◇三島中より

褒めて伸ばすが大切だと思っているが、先生方とフラットになることが難しい。先生方と同じ目線や手立てがあれば教えてほしい。三島中学校では、校長室に出勤札がない。声をかけたり、話をできる関係を作ったりする方法を教えてほしい
⇒ 日々の勤務を通じて感じている素朴な疑問や悩みなどの話し合いをメンターチームで実施した。話し合いの手法として、「探究の対話（p 4 c）」を取り入れた。p 4 c を実施するときはあだ名をつけて行う。醸芳中も出勤札はない。先生方とチャットで情報交換する方法もある。

チャットワークでは炎上することもあった。スタートするときに決まりを作ることが大事である。



【質疑の様子】

（2）福島支会の取組について

時間の関係で質問は特になかった。

3 まとめ

（1）福島市立福島第四中学校 渡部 正晴

「令和の日本型学校教育」を担う教師の育成についてチーム力を高めるために、校長は何らかの手を打っているはずである。ノーベル賞を受賞した研究者は、人材育成のためには基礎研究が大切だと言っている。教育としての基礎研修は大切であり、教育とはコミュニケーションを大事にする仕事でもある。時代は大きく変わっている。どうアップデートしていくかが鍵である。

人材育成とは何だろうと考えると山本五十六の「やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば、人は動かじ。」という言葉がある。研修は何のためにやっているのか。若い先生方は「こうなりたい。こうしたい。」という思いがある。

実際にやってみることが研修の大きな部分ではないか。校長は研修をプロデュースすることが大切である。

今後の学校は、不登校児童生徒が34万人、一定の条件を満たせば、出席の取扱い。学校の存在価値は？部活動の地域展開。部活動は学校から離れていくと、部活動で勝負していた先生はどうなるのか。中学校の先生は、人間関係調整力や授業力が鍵となる時代になるのではないか。今後何を大事にする研修を実施していくべきよいかを考えていく必要がある。

【第8分科会 [経営課題] 学校と地域の連携・協働による「チーム学校」と「働き方改革」の実現】

【発表者】	西郷村立川谷中学校	早川 貢	柳津町立会津柳津学園中学校	佐藤 盛俊
	双葉町立双葉中学校	寺島 克彦		
【司会者】	塙町立塙中学校	石田富加志	会津美里町立新鶴中学校	笛川 光威
	川内村立川内小中学園	海老原 篤		
【記録者】	福島市立西信中学校	関場 俊宏		
【運営委員】	白河市立白河中央中学校	菊池 淳一	会津美里町立高田中学校	小関 英紀
	浪江町立なみえ創成中学校	青田 亮一		
【進行係】	いわき市立草野中学校	森 敏行		
【会場係】	南相馬市立小高中学校	小林 喜徳		

1 発表の概要

(1) 東西しらかわ支会

西郷村立川谷中学校 早川 貢

はじめに多様な人材の専門性を生かした「チーム学校」と「働き方改革」の実現を目指した研究の趣旨、視点について説明し、その視点に沿って研究の概要について発表した。

視点1の「教職員や多様な人材の専門性を活用し、組織力を高める学校経営の在り方」について、各中学校の実践をもとに「多様な人材の専門性を活用し、組織力を高める取組」や「地域サポートを活用し、学校と地域を繋ぐ持続性のある取組」について説明した。

続いて、視点2の「チームとしての学校と地域の連携・協働体制の在り方」について、「地域学校協働活動事業を活用した取組」や「コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進を目指した取組」について説明した。

最後に、視点3の「専門スタッフ等との連携による教員の働き方改革の実現」について、「多様な人材を活用し、教員の負担を軽減した取組」について説明した。

(2) 両沼支会

柳津町立会津柳津学園中学校 佐藤 盛俊

はじめに両沼支会に所属する中学校の地理的条件や学校規模による地域格差について説明した。その後、研究の趣旨、視点について説明し、その視点に沿って研究の概要について発表した。

視点2の「チームとしての学校と地域の連携・協働体制の在り方」について、各中学校の実践をもとに「『部活動』での地域連携について（近隣校との交流や地域人材を活用した取組）」や「地域の人材や教材を活用した授業（町の美術館や県立博物館のスタッフ、地域の方をゲストティーチャーとして活用した取組）」、「地域と連携した『環境整備や奉仕作業』（コミュニティ・スクールで提案された地域の清掃活動を実現した取組）」について説明した。



【研究協議 I 両沼支会発表の様子】

(3) 双葉支会

双葉町立双葉中学校 寺島 克彦

はじめに双葉郡の気候や産業の様子、福島第一原子力発電所事故の影響による現状について説明した。その後、福島県双葉郡教育復興ビジョンに基づく実践の概要について発表した。

視点1の「教職員や多様な人材の専門性を活用し、組織力を高める学校経営の在り方」について、各中学校の実践をもとに「アドバイザーの協力支援によるキャリア教育の推進」「学校司書を活用した学校図書館のセンター機能強化」「元プロボクサーによる食育授業の実施」について説明した。

続いて、視点2の「チームとしての学校と地域の連携・協働体制の在り方」について、「こども関係機関会議を活用した個に応じた支援体制整備」「地域文化伝承教室の活用促進」について説明した。

2 質疑

(1) 東西しらかわ・両沼・双葉支会3支会の取組について

◇草野中より 学校運営協議会におけるスクラップ（削減）する内容について

⇒働き方改革に向けて、削減する視点を持

ながら地域展開する内容を検討する。

⇒ P T A奉仕作業も地域応援団に移行し、学校行事から削除する方向である。

⇒地域と近い位置に学校があるが、CS までは確立されていない。教員が行うさまざまな調整に時間を要するため、管理職が担っている。

⇒コミュニティ・スクール委員の学校理解が不足しているため、要望や意見が多くなってしまう。そのため、協議会の意図や学校の現状を伝える立場の人がいることが重要である。

(2) 東西しらかわ支会の取組について

◇特になし

(3) 両沼支会の取組について

◇江名中より 部活動を中心とした時間外勤務時間の超過について

⇒多くの生徒がスポーツ少年団に所属しているため、週末は地域展開で進めており、将来はクラブ化も検討している。はじめは保護者も違和感を覚えていたが、進めているうちに違和感はなくなってきた。

(4) 双葉支会の取組について

◇ふくしま支援学校より ゲストティーチャーの要請について

⇒学校の中に地域の人々が存在している。学校と地教委が連携しており、地教委に希望する人材の確保について相談している。双葉支会では多方面からの支援の紹介が多い。

3 協議内容

(1) グループ協議の柱（視点1）

□ チーム学校と働き方改革

◇グループ1より（代表発表 稲田学園）

- SC、SSWが協力的であり、登校しうりや保護者相談に積極的に関わっている。

◇グループ2より（代表発表 川谷中）

- 働き方改革と地域連携の関わりで地域の要望をすべて受け入れるのは難しいため、学校の現状を理解してもらうことが重要である。

◇グループ4より（代表発表 四倉中）

- 地域連携協働において、学校の要望だけでなく地域への協力も必要であるが、働き方改革の視点ではどうか。

◇グループ5より（代表発表 草野中）

- P T A行事の検討は必要である。
- 教頭の働き方改革・業務軽減は急務である。

(2) グループ協議の柱（視点2）

□ 学校と地域の協働体制

◇グループ1より（代表発表 稲田学園）

- 小規模校では、郷土理解、郷土愛を深め地域のよさを感じることで、生徒数の減少を防ぐことが重要である。

◇グループ3より（代表発表 ふくしま支援）

- 地域人材との連携による多忙感が課題である。校長の調整力とマニュアル化が必要である。
- 地域人材活用の継続性が課題となる活動もある。
- 地域人材の活用は生徒の視野を広めることにもつながる。

4 まとめ

(1) 白河市立白河中央中学校 菊池 淳一

- 教職員以外の多様な専門スタッフの活用に向けた校長の積極的な関わりが大切である。
- SC、SSWとの協働、コミュニティ・スクールの活用をどう生かしていくかが重要なカギとなる。
- 今後も、校長の強いリーダーシップを大切にしていく。

(2) 会津美里町立高田中学校 小関 英紀

- 学校格差が大きいため、アンケート等の結果を活用し、研究を進めていく。
- コミュニティ・スクールの有無にかかわらず、地域連携に成果が出ている地域もある。
- 地域展開、地域協働には課題があるが、負担軽減や地域の活性化には成果が出ている。
- 地域連携と働き方改革の関わりは今後も課題である。
- 地域連携には、地域づくりに貢献していくという視点も必要である。

(3) 浪江町立なみえ創成中学校 青田 亮一

- 今後も教育復興ビジョンに基づく取組を推進していく。
- 「ふるさと創造学」により地域と密接に取り組んでいる。しかし、若手教員の中には負担に感じている教員も多く、自身のスキルアップの場として意識させることが重要である。
- 児童生徒に地域外からの移住者が多いため、「地域を知る」から始める。校長としても地域素材・人材の効果的活用を推進していくことが重要である。また、地域コミュニティや保護者のコミュニティの構築を進めていくことも求められている。
- 商品開発や6次産業化にも取り組み、地域貢献として進めていきたい。

記録写真《開会式》



【主催者席】



【来賓席】



【司会】



【開式の言葉】



【福島県中学校長会会長あいさつ】



【福島県教育委員会教育長あいさつ】



【来賓祝辞】



【閉式の言葉】

記録写真《講演会》



【講師紹介】



【講師 伊藤 泰夫 氏】



【演題「福島県“発”のイノベーションを創出する人材」の輩出を目指して】



【御礼の言葉】



【花束贈呈】

記録写真《分科会》



【第1分科会】



【第2分科会】



【第3分科会】



【第4分科会】



【第5分科会】



【第6分科会】



【第7分科会】



【第8分科会】

表紙・裏表紙 写真提供
相馬野馬追執行委員会

